

松村先生のこと

佐 藤 勝

このたび松村緑先生が定年退職されることになった。時の流れの早さにただ驚くばかりである。後進の者として僭越ではあるが、真に惜別の情に耐えない。

先生の御専門とされるところはおおむね近代文学，とりわけ近代詩であるが，ほんとうに御研究になっていた分野は，論文目録を拝見しただけでもわかるとおりそんな狭い範囲のものではなかった。ただ私たちの方に先生が御研究になっているものすべてを学び取るだけの能力がないため，私個人についていえばもっぱら近代文学について多くのお教えを受けることになった。そのことを，感謝の念をこめてまず書きしるしておきたい。

私たちの研究領域では，今や作品論といわれるものが全盛をきわめている。このことについては私たちに責任がないわけではないが，作品論への私たちの当初の志向が作家の側から作品を説明するような素朴な方法論の克服を意図したものであったのに対して，近來のそれは一般的にはむしろ作品を作家主体から切り離すことだけに作用してそれを改めて方法的に作家につないでいく道を見いだせないままになっていると評してよいであろう。そういう現状に対して，先生の研究対象としての文学に向かっていくあり方はよく批評的でありえた。先生が一貫してくずされなかった基本的な立場，それは作品が作品として形象化されていくときの唯一の通路であることばに対するきびしさ，厳密さであり，また作家そのものに対する深い追求であったと思う。しかもその前者が作品に，後者が作家に向かうものとした時に，先生は研究者としてどうしても避けがたいいわばぎりぎりのところで両者をつなぐのに自らの享受者としての感受性を内側に探られた。私の理解する先生の方法を非礼をかえりみずにいえばこういうことになる。そして少なくとも私はほかならぬその点で最も深く教えていただいたのである。私たちはどちらかというと図式をつくりたがるが，しかしその図式が文学だとはいえない。そういう時に図式化・概念化の誘惑に抗してもっと手前で踏みとどまらなくてはならぬ場合があるということを，先生は無言のうちに私たちにお示しになった。

先生からお教えをいただかなければならぬことは数多くある。手前勝手な言い方ではあるが，そういうことも含めて，先生がこれからも御健康で研究をお続けになることを衷心から願っている。